

一 古典の言葉―古文と現代文の違い

古代から近世（江戸時代）までの言葉を古語（文語）といい、古語で書かれた文章を古文（文語文）という。一方、現在私たちが用いている言葉を現代語（口語）、文章を現代文（口語文）という。

1 語彙

1 つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。
（徒然草・序）

暇でものを寂しいのに任せて、一日中硯に向かつて、心に浮かんでいくととりとめのないことを、何ということもなく書きつけると、不思議なくらい気持ちが高ぶってくることだ。

古語には例文1の「硯」「心」などのように、現在でもほとんど同じ意味で用いられている語もある。しかし、現在では用いられなくなった古文特有の語や、現代語と形は同じでも意味の異なる語がある。「つれづれなる」「よしなしごと」などが前者の例であり、「あやしう」などが後者の例である。

2 文法

文法は言葉の仕組みや決まりである。文語の文法（古典文法）は、平安時代中期の用法に基づいており、現代語の文法（口語文法）とは異なる点がある。例文1の「あやしうこそものぐるほしけれ。」には、古典文法特有の「係り結び」が起きている。

▽古文の特徴

上段の古文と現代文の違いも含め、古文の特徴をまとめると、次のようになる。

①歴史的仮名遣いで書かれている。
 ②主語や助詞の省略が多い。

【例】竹取の翁といふ者へが）ありけり。
（たけくらし）

↓助詞「が」が省略されている。
 ③古文特有の語がある。

④現代語と形は同じでも意味の異なる語がある。

⑤古文特有の助動詞・助詞がある。
 【例】竹取の翁といふ者ありけり。
 ↓「けり」は現代語の「：タ」

にあたる過去の助動詞。
 ⑥係り結びの法則がある。
 ↓P.114

3 歴史的仮名遣い

古文では、平安時代中期の用法に基づいた歴史的仮名遣いが用いられており、現代仮名遣いとは異なる点がある。例文1の「向かひて」「あやしう」「ものぐるほしけれ」などは、口語なら「向かいて」「あやしゅう」「ものぐるおしけれ」と表記される。

Point

①語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」と読む。

【例】くふ（食ふ）↓クウ　　ななへやへ（七重八重）↓ナナエヤエ

ただし、語頭に「は・ひ・ふ・へ・ほ」がある語が他の語に付いて複合語となった場合、そのまま読む。【例】あさひ（朝日）↓アサヒ

②ワ行の「ゐ・ゑ・を」は「イ・エ・オ」と読む。

【例】ゐる（居る）↓イル　　こゑ（声）↓コエ　　をんな（女）↓オンナ

③助動詞「む」や助詞「なむ」などの「む」は「ン」と読む。

【例】かimotoひせむ（↓ン）。　　もと光る竹なむ（↓ン）一筋ありける。

④「くわ」「ぐわ」は「カ」「ガ」、 「ぢ」「づ」は「ジ」「ズ」と読む。

【例】くわかく（過客）↓カカク　　ぐわんじつ（元日）↓ガンジツ
 ぢごく（地獄）↓ジゴク　　みづ（水）↓ミズ

⑤母音が重なる場合、次のように長音で読む。

・「あう」↓「オー」　　【例】やうやう→ヨーヨー　　yāuyau → yōyō

・「いう」↓「ユー」　　【例】いうげん（幽玄）↓ユーゲン　　iugen → yūgen

・「えう」↓「ヨー」　　【例】えう（要）↓ヨー　　eu → yō

・「おう」↓「オー」　　【例】おうな（嫗）↓オーナ　　ouna → ōna

⑥母音に「ふ」が続くとき、①と⑤の原則が働いて長音になる。
 【例】けふ（今日）↓キョー　　kehu → keu → kyō

▽現代に残る歴史的仮名遣い

現在私たちが用いている次のような助詞の表記に、歴史的仮名遣いの名残が見られる。

【例】私は、弟を迎えに、保育園へ行った。

▽現代仮名遣いと異なる読み方

現代仮名遣いと発音が異なる場合もあるので、注意が必要である。

【例】法師　ほふし　ほうし　ホーシ
歴史的仮名遣い、現代仮名遣い、発音

練習問題

次の歴史的仮名遣いで書かれている語の読みを、現代仮名遣いで答えなさい。

- | | |
|-----------|--------------|
| (1) かは川 | (2) こひ(恋) |
| (3) いへ(家) | (4) ゐなか(田舎) |
| (5) すゑ(末) | (6) くわじ(火事) |
| (7) ふぢ(藤) | (8) めづ(愛づ) |
| (9) てふ蝶 | (10) せうと(兄人) |

す
さす
しむ

活用		活用		活用		活用		活用		活用	
基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型				
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	下二段型				
さす	させ	させ	さす	さする	させ	させよ					
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ					
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ					

== 接続 == 「す」 四段・ナ変・ラ変動詞の未然形

「さす」 右以外の動詞の未然形

「しむ」 活用語の未然形

== 意味 == ①使役(…セル…サセル)

- 1 題出だして、女房にも歌詠ませ給ふ。
(枕草子・五月の御精進のほど)
- 2 便りごとに物も絶えず得させたり。
(土佐日記・二月一六日)
- 3 国の守のもとにして、これをことわらしむ。
(沙石集・正直の徳)

②尊敬(…ナサル・オ…ニナル)

- 4 地藏のありかせ給ふ道は、我こそ知りたれ。
(宇治拾遺物語・巻二)
- 5 まさなうも敵に後ろを見せさせ給ふものかな。
(平家物語・敦盛最期)
- 6 やがて山崎にて出家せしめ給ひて、
(道真は)そのまま山崎で出家しなまじりつた。

◎「す」「さす」「しむ」の意味の判別

- ①他の尊敬語を伴わない「す・さす・しむ」⇒使役 例文2・3
 - ②他の尊敬語を伴う「す・さす・しむ」⇒使役または尊敬
「……に」(使役の対象) が示されているか、文脈上補える
⇒使役 例文1
・(帝は桐壺の更衣を) 故あることのふしぶしには、まづ参
う上らせ給ふ、
(帝は桐壺の更衣を) 何か理由のある折ごとに、まづ先に参上させ
なまじり、
- 「……に」(使役の対象) が示されておらず、文脈上補えない
⇒尊敬 例文4・5・6
- *このように尊敬語を二つ重ねる用法を最高敬語という。
・上も聞こしめして、興ぜさせおはしましつ。
(枕草子・五月ばかり、月もなういと暗きに)
帝もお聞きになって、おもしろがっていらつしやつた。

◎軍記物語の特殊用法

軍記物語では、「す」「さす」「しむ」が、受身の文脈で用いられる場合がある。これは、武士が「される」意の受身表現を嫌い、「させてやる」の使役の形で表現したものといわれるが、現代語訳するときは受身で訳してよい。
・弓手の膝口を射させて、立ちも上ならず、(平家物語・知章最期)
左の膝頭を射られて、立ち上がることもならず、

▽複合語

- 尊敬・謙讓の動詞、補助動詞に「す・さす」が付いて敬語を強めた語は、一語の敬語動詞として扱う。
- 〈尊敬語〉
- ・たまはす↑たまふ十す
 - ・のたまはす↑のたまふ十す
- 〈謙讓語〉
- ・聞こえさす↑聞こゆ十さす
 - ・参らす↑参る十す



▽「す」「さす」「しむ」の接続と使い分け
「す」「さす」：四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に付く。「四ナラ未然形」と見える。
「さす」：…その他の、未然形の活用語尾がa段でない動詞に付く。
「す」と「さす」には、意味上の違いはなく、接続する動詞の活用の種類が違っただけである。

▽「す」「さす」と「しむ」の用法の違い
「す」「さす」：主に和文体で用いられた。
「しむ」：主に漢文訓読体で用いられた。

五 俳諧の修辭法

俳諧は、連歌に俳諧味を加えた俳諧連歌の略称である。その連歌の発句（五七五）が独立したものが俳諧となった。俳諧にも和歌と同じように幾つかの表現の決まり事である修辭がある。主な修辭に**季語**・**切れ字**がある。

1 山道を歩いて来ると何やら心ひかれるすみれが咲いていたことよ。

2 五月雨が降って、水量が増した大河の前に家が二軒立っているよ。

1 季語

俳諧連歌の発句には必ず季節を表す言葉を詠み込む決まりがあり、季節を表す言葉を**季語**という。季語により、表現しきれない余情を組み込むことができると考えられている。季語を季節ごとに分類し、集めた本を「歳時記」という。

1 山路来て何やらゆかし**すみれ草**

「すみれ草」が春の季語である。

（「野ざらし紀行」）

2 **五月雨**や大河を前に家二軒

「五月雨」が夏の季語である。

（「蕪村句集」）

〈**主な季語**〉 現代の季節感と季節が異なる季語もあるので注意する。

春	鶯・梅 霞・蛙 桜・蝶 花見・山吹 行く春	夏	青葉・鸕舟 卯の花・衣更へ 扇・五月雨 涼風・端午 牡丹	秋	朝顔・天の川 稲妻・雁 霧・相撲 月・野分 松虫・夜寒	冬	大晦日・木枯らし 鴨・枯野 氷・小春 時雨・霜 雪
---	-----------------------------------	---	--	---	---	---	---------------------------------------

2 切れ字

句中や句末に用いられ、言い切る気持ちを表す語を切れ字という。連歌の発句に重みを持たせるために用いられたことから俳諧の修辭に発展した。句の中に断絶を置くことで余情が生まれる。

3 枯れ枝に鳥が止まっていたよ。秋の暮れ方に。

4 明け方の光に照らされて浅間山から流れて来た霧がお膳の上をはっている。

4 有明や浅間の霧が膳をはふ

（「荒野」）

代表的な切れ字は「や」「かな」などの助詞、「けり」などの助動詞の終止形である。

（「七番日記」）